

吉

野

川

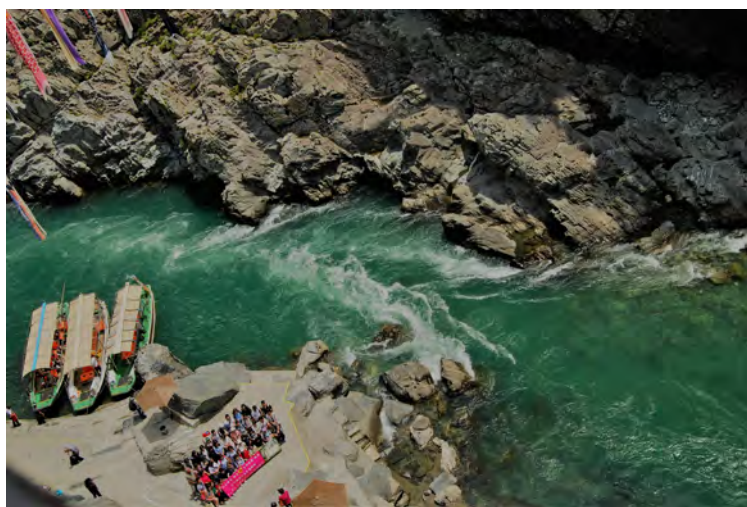
お

散

歩

紀

行



美しい溪谷と急峻な山々の伝説のまち 山城



今、三好市山城町が熱い! 台湾、香港をはじめ、世界中から多くの観光客が訪れている。

山城町には、体験観光として人気のラフティングがあり、年間約4万人が激流下りを楽しんでいる。そして、今年10月には、いよいよラフティング世界選手権が開催される。世界のトップアスリートが集い、レースラフティングを競いあう。三好市、県民にとってもフェスティバルだ。

また、急峻な山々が連なるのも、山城の大きな特徴だ。ここには、昔から多くの妖怪伝説が残る。舟下りが多くの観光客を集めている秘密や、ラフティング世界選手権に出場するリバーフェイスのメンバー、妖怪でまちづくりに取り組んでいる方に話を聞いた。

吉野川で日本国内初のラフティング世界選手権開催！ 地元開催の大会で再び頂点へ 女子レースラフティングチーム「ザ・リバーフェイス」



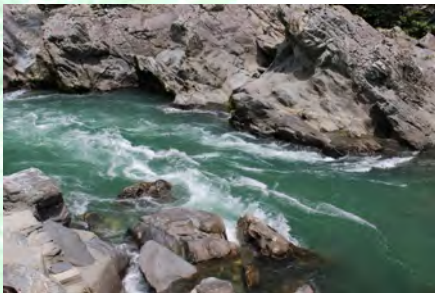
世界選手権や吉野川への思いを語ってくれた「ザ・リバーフェイス」の向かって左から阿部雅代さん、船田理恵さん、キャプテン水澤知香さん、小林裕子さん。現在のメンバーは8人。心をひとつに世界に挑む。

今年の10月、日本国内では初めての開催となる「ラフティング世界選手権2017」が、吉野川中流域（徳島県三好市山城町・高知県長岡郡大豊町）を舞台に開催される。これまでヨーロッパ、オセアニア、南米など世界各国で開催されてきた歴史ある大会だ。ラフティングは、ゴムボートに乗って、大自然を感じながら激しく流れが変わる川を下っていくアウトドアスポーツ。大歩危・小歩危といった激流がある吉野川は、世界に誇る日本有数のラフティングのメッカで、年間約4万人がラフティングを体験するために訪れている。世界選手権には、世界のトップアスリート達が、22カ国から71チーム（522人）出場する。（8月23日時点の出場数）

吉野川を拠点に活動しているのが、女子ラフティングチーム「ザ・リバーフェイス」だ。結成は2007年。2009年から2016年まで、ラフティング女子日本代表チームとして、毎年世界大会に出場（2012年のみ世界大会開催なし）。2010年には総合優勝、その他の年も準優勝や3位など、輝かしい成績をおさめてきた。8人のメンバー全員が全国各地からラフティングをするために移住してきた。きっかけは、学生時代の探検部、ラフティングのリバーガイドになりたいと思い移住など様々だ。学生時代に、吉野川で観光客としてラフティングを体験したメンバーもいる。「世界を目指せるチームに入りたいと思いました」と語る水澤キャプテン。たしかに世界一になれるチャンスは誰の人生にでも訪れるわけではない。「ザ・リバーフェイス」なら、優勝経験もあり、これからも世界一を目指すことができる。メンバーは、観光客にラフティングを安全に楽しんでもらえるように指導するリバーガイドや、医療関係などそれぞれの仕事しながら「結果は練習量に比例する」と、週6日の早朝練習、トレーニングなど地道な努力を続けている。「地元開催の大会で世界一になる！」という思いはひとつ。競技中は

何も聞こえなくなる瞬間が訪れるほど集中する。ラフティングの魅力は？と尋ねると「自然の中をメンバーで力を合わせて、自然の力も借りながら下っていくところ（水澤キャプテン）」「自然を五感で体感できる、冒険感をもってワクワクできるところ（阿部さん）」「川と向き合えるところ（小林さん）」「チームスポーツでみんなでひとつのボートに乗り、漕ぎ続けているところ（船田さん）」と、次々と笑顔で話してくれた。吉野川でのラフティングの醍醐味は「激しいところもあるが、メリハリがあって楽しい川。他国ではかなり危険を感じる時もあるが、激しさもちょうどいい」と実感している。

今回は、練習でも慣れている地元開催であるだけに、選手たちの意気込みはもちろん、地元からの期待もより一層高まっている。練習場近くに応援の懸垂幕も掲げられ、今回の取材中も出会った人から「応援しています」と、声をかけられるなど人



日本三大暴れ川のひとつ吉野川。当日はどのような激しい流れが選手たちを待っているのか。

気者だ。メンバーそれぞれも

いつも国外で競い合っている強豪メンバーが吉野川に来て競い合えることにもワクワクしている。「世界トップクラスのラフティングの技が、これほど一同に見られる機会はなかなかないので、日本で初開催となる世界選手権に是非とも、たくさんの方々に観に来てほしい」とも語ってくれた。

最後に、みなさんにとって吉野川とは？という質問には「チームに入って7年目。何回川を下っても、技術的な課題を見つけることができる学びの場所でもあり、生活の場所（水澤キャプテン）」「これからも自分の人生を共にしていきたい川。レースとしてはもちろん、たくさんの可能性のある川。地域の活性化にもつながる場所（阿部さん）」「修行の場でもあり、ホームリバー（小林さん）」「最高の川。課題を教えてくれる場所（船田さん）」と答えてくれた。いよいよ近づいてきた世界選手権。ラフティングや吉野川の魅力をも再認識できる絶好の機会となりそうだ。

日本初開催！ラフティング世界選手権2017

世界最高のラフティング競技を観に行き選手たちを応援しよう！

開催日：2017年10月3日（火）～10月9日（月・祝）

競技会場：吉野川中流域（徳島県三好市山城町・高知県長岡郡大豊町）

競技カテゴリー：①オープン（男・女）②マスター（男・女）

③ジュニア（男・女）④ユース（男・女）

競技種目：国際ラフティング連盟（IFR）ルールに基づく4種目タイムレース（6人乗り）スプリント競技（1艘でのタイムレース）、ヘッドトゥヘッド（2艘によるトーナメントレース）、ダウンリバー競技（長距離タイムレース）スラローム（規定区間通過総合タイムレース）

問合せ先：三好市役所観光課ラフティング世界選手権推進室

TEL：0883-72-7628 FAX：0883-76-0203

E-mail：kankou@city.tokushima-miyoshi.lg.jp



世界選手権PRポスターのモデルも務めている「ザ・リバーフェイス」メンバー。





平成26年3月に国の天然記念物（地質鉱物）に指定された「大歩危」。両岸に見られる岩石は、2億年前から1億年ほど前に海底深くで作られた岩の数々だ。吉野川の激しい流れによって削られ（侵食され）続けている日本有数の大峡谷だ。

美しい吉野川の渓谷美を遊覧船に乗って堪能できるのが「大歩危峡観光遊覧船」だ。大平克之さんで5代目。古くから多くの人々が行き来する国道32号線沿いにあり、もともとは食事処や木賃宿を運営し、川漁も行ってた。遊覧船の原形は明治23年頃。初代大平磯吉氏が、かんどり船に宿泊客を乗せたのが始まりだ。現在の観光遊覧船となったのが、昭和20年頃からだ。原形からだ^{ていしん}と100年以上の歴史を持つ遊覧船。全国的に有名になったのは明治42年。当時の逓信大臣であった後藤新平氏が、大歩危峡谷の美しさ^{ていしん}に感銘を受け、「岩に題す 天下第一歩危の秋」と詠み、今も石碑が敷地内に残されている。

現在では日本国内だけでなく、想像以上のおもてなしが話題を呼び100カ国以上の外国人観光客が訪れている。言葉だけではなく、国旗も用意して迎えているほどの徹底ぶり。昨年は約4万人の外国人観光客が訪れた。遊覧船での歓迎ぶりは、台湾のニュースでも紹介されたほどだ。国内外で吉野川の魅力が知られている。



大歩危峡まんなか 代表取締役社長大平克之さん。



昭和25年頃の遊覧船の様子。写真提供：大歩危峡まんなか



アクセスマップ

※「吉野川Diary」で紹介している道の駅大歩危についても地図上に表示

大歩危峡まんなか 大歩危峡観光遊覧船

〒779-5451 徳島県三好市山城町西宇1520

TEL: 0883-84-1211 FAX: 0883-84-2411

料金: 大人1,080円 小人(3歳~小学生) 540円

団体割引: 15名以上有

営業時間: 9時~17時 所要時間: 往復30分随時運航

運航: 年中無休※強風、増水時は欠航。



ここに暮らす

ここに生きる

四国の秘境山城・大歩危妖怪村
事務局長

平田 政廣さん

地域に伝わる妖怪でまちづくり

右、平田さんと児啼爺(こなきじじい)の像、さまざまな山城の妖怪スポットをご案内いただいた。左は、急峻な山々、2008年に『四国の秘境 山城・大歩危妖怪村』は、『後世に残すべき怪遺産』に認定されている。



この山城の地に子供の頃から暮らす平田さん。平田さんの家から下を見下ろすと雲海が見えるというから驚きだ。

山城町は、急峻な山々がつらなる地すべり地帯。暗がりや危険な崖、深い淵、細く暗い山道などが多い。実際に人が山で行方不明になり、事故なども多かった。このような現実と密接な関わりを持って、山城の妖怪伝説が生まれたのだ。それらの場所に「妖怪がおるぞ〜」と子どもたちに伝えていくことで、危険な場所から子どもたちを遠ざけ、守る役割があった。温かい親心から生まれた、どこか懐かしい、まさに暮らしの中に息づいた妖怪だった。もともと、児啼爺(こなきじじい)は、遠野物語で知られる民俗学者の柳田国男さんが編纂した著書「妖怪名彙(1938)」に紹介された日本全国の妖怪の中に記載があった。そこには、阿波の山間部の記載のみで、具体的な場所は特定されていなかった。

平田さんは、山城町役場につとめていた時、妖怪研究家の多喜田昌裕さんと出会う。多喜田さんは、山城町で聞き取り調査をし、「泣いていたら、児啼爺が山から連れにくるぞ」と言われていた年長者、平田五郎さんと出会った。これらの聞き取りと武田明さんの著書「民間伝承

(1938)」の記述が一致し、山城町かみみょうだいら上名平が、伝説発祥の地として特定された。

以来、藤川谷の会が中心となって、妖怪の掘り起こしが始まり、合わせて、藤川谷川沿いに妖怪モニュメントの設置、「妖怪まつり」、妖怪の話を聞きながら、妖怪の里を語り部と一緒に歩く「妖怪ウォーキング」など様々なイベントを開催し、妖怪の里の気運を盛り上げている。2010年には、『道の駅 大歩危』に妖怪屋敷がオープン。有志が集まって、作った妖怪を展示。手作りとは思えない素晴らしいものだ。郷土の伝説を残したいという温かい思いがあふれている。今後は、休校になった上名かみみょう小学校を利用して、大学生や高校生が安く利用できる妖怪ホテルにしたり、妖怪について学ぶ妖怪学校も行いたいと夢も膨らむ。

最後に「ここは、ええところですか」と聞いてみた。「ええとこやと思いますよ」とおっしゃる平田さん。「山があって川があって、空気が澄んで、なにもないという人もいるけど、食べ物は自分で作る、米、粟、稗などの雑穀、野菜や芋もね、四国の真ん中で交通の便もいい。」これからは数々の妖怪たちとともに、ここに生きる。